

臨床部門

実践への示唆の視角から見た臨床部門の研究動向

岡村 達也

(文教大学人間科学部)

はじめに

本稿は、日本教育心理学会を中心に、わが国最近1年の教育心理学・臨床部門の研究動向と展望を記す。

取り上げる研究またはテーマは次の手順によった。まず、『日本教育心理学会第45回総会発表論文集』臨床部門に属する研究。ただし、学校心理学、教師のメンタルヘルスに関する研究、障害(e. g., ADHD, LD, 自閉症)、社会(友人関係、地域・階層・文化・歴史)、成人・老人部門に属する研究は除いた。

次に、こうして選択した研究のテーマに関する研究を、『教育心理学研究』50巻3号～51巻2号、『日本心理臨床学会第22回大会発表論文集』、『心理臨床学研究』20巻3号～21巻2号から選択し、取り上げた。

次を特記しておく。除いたものの中に、老人、発達障害に関する研究、また、学校心理学に関する研究の中に不登校に関する研究、が相当量ある。

各研究またはテーマは、次のような臨床心理学の体系(野島, 1995, 伊藤, 1999, 下山・丹野, 2001-02, 岡村, 2002, 下山, 2002 参照)にしたがって分類した。(1)まず、臨床心理学的対象認識の軸として、①いわば横軸の異常心理学と、②いわば縦軸の発達臨床心理学。前者は病理、後者は発達、の認識軸である。(2)次に、臨床心理学的対象関与の方法論として、③アセスメント、④カウンセリング。前者は理解、後者は援助、の方法論である。(3)最後に、臨床心理学的実践領域あるいは社会臨床心理学、である。

視角は実践への示唆に置く。筆者が街の一カウンセラーでありたいと願っているからである。

対象認識の軸Ⅰ：病理—異常心理学—

対人恐怖

調査 中学生を研究協力者に、栗谷・本間(2003)は、対人恐怖心性尺度のうち対人緊張因子と、自己愛傾向尺度のうち注目賞賛要求因子とが、中2と女子においてそれぞれ高いことを見出し、これら2因子の高低によって4群を設定、SCTによって特徴を見たところ、対人恐怖群(対人緊張高・注目賞賛要求低)において、他群には見られない「恥ずかしがり屋」「思い込みが激しい」などの記述

を見出し、援助者は、本人の説明する自分をそのまま認めた上で、何ができるか一緒に考え、側にいて支えることが必要、と示唆する。臨床の基本である。

高校生・大学生を研究協力者に、田井(2003)は、「リーダーシップをとる」「精神的強さをもつ」「明確な態度をとる」などの男性性期待を過剰認知する者ほど、現在の自分との落差が広がり、対人場面で当惑したり、緊張したり、集団に馴染めずにいることを見出している。性役割葛藤、特に男性性期待の過剰認知の点からクライアントを理解する可能性が示唆される。

事例 太田(2003)は、見知らぬ人と空間を共有しなければならないとき対人恐怖になるのは自然だが、対人恐怖でない人は不安や緊張を「この人は…だから安全」とオーガナイズする能力をもっている。かくて対人恐怖からの回復は、他者との共存によってもたらされる動揺をオーガナイズする能力を身につけていく過程、とも言える。カウンセリング場面は他者(=カウンセラー)との対面という点で緊張喚起的であり、クライアントは場面をオーガナイズすることが求められる。これが上手くいけば、面接外での対人緊張をオーガナイズしていくステップとなる。ところが、対人恐怖のクライアントは対人的社交的スキルが不足していることが多く、面接場面を沈黙が支配するようになると、なかなかそこから抜け出せない。そのとき、まさに対面しているカウンセラーのことについて尋ねることは、場を構造化し、不安を緩和する作用がある。対人恐怖大学生の事例を通して、これに対するカウンセラーの自己開示が、対人関係のスキルと構造化に役立つことを例証している。対象理解と対象援助とがセットになった、説得的な技法論的検討である。

摂食障害

調査 摂食障害者の特徴(自己評価)として、眞榮城・齊藤(2003)は、専門学校・大学・社会人の女性を研究協力者に、自己受容感の高さが摂食障害傾向軽減要因として機能すること、また、摂食障害者は自己受容感、容姿・社交性・他者支援能力の評価が低いことを見出している。その苦しみが忍ばれる。

発達の要因として、後藤佳代子(2003)は、大学生を研

究協力者に、男子の場合、自己の個別性の自覚という孤独感の発達に伴って摂食障害傾向を帯びるが、女子の場合、個別性の自覚のみでは説明できないことを見出している。

心理-社会的要因として、齊藤・眞榮城 (2003) は、専門学校・大学・社会人の女性を研究協力者に、社会文化的圧力としての体型文化の内在化が食行動異常を引き起こす重要変数であることを見出している (社会-文化的要因を考慮しない臨床は個人に対する暴力だ)。

個人的嗜好の要因として、加藤 (2003) は、女性において、甘みに対する態度が食行動の異常傾向と強く関連すること、強い痩せ願望+甘みに対する嗜好の両価性が食行動の異常傾向と関連すること、精神的安らぎを与える甘みの対処方略としての利用は食行動の異常傾向を高める可能性があること、を見出している。

以上、孤独感・体型文化・甘みいずれもクライアントと語り合える (クライアント理解の) テーマである。

事例 櫻井・櫻井 (2003) は、摂食障害男子大学生に試みた言語中心の療法・創作療法・運動療法の統合の試みを、春原 (2003) は、「過食嘔吐モンスターと私」の描画課題により問題行動 (= 過食嘔吐) を外在化させるグループカウンセリングを、伊藤 (2003) は、摂食障害への認知療法の適用について (詳細後述)、秋元・鈴木・長野 (2003) は、摂食障害者の母親に対するグループアプローチの試みを、それぞれ報告している。

自己愛

中学生を研究協力者に、栗谷・本間 (2003, 前出) は、葛藤群 (対人緊張高・注目賞賛要求高) の特徴として、元気で生き生きと同時に両価的で迷い、を見出し、「あなたは望まれてこの世にある」というメッセージをもって向かい合うことが援助の基本と示唆する。本群に限らぬ。

高校生を研究協力者に、高橋 (2003) は、親の養育を統制的と感じている女子は、回避傾向をもつ自己愛 (である対人恐怖心性) が高く、認めてもらえないという自己愛憤怒を感じていること、を見出している。親像は変わらぬクライアントとの語りのテーマである。

大学生を研究協力者に、小塩 (2002) は、自己愛傾向が高い群を、2種類の自己愛①誇大的で攻撃的、自己中心的で他者の反応に関心を示さない群、②抑制的で引きこもりがち、他者の評価や反応に敏感な群—に類した2群に分類可能なことを見出している (上記の高橋, 2003 の「回避傾向をもつ自己愛」は②に相当)。臨床的にかねて認識されてきたことが、実証手続きとデータのセットを得たことで、その認識 (物の見方・世界の秩序様式) の確かさが増した。

抑うつ

調査 小学生 (小3~6) を研究協力者に、武田 (2003)

は、児童期抑うつでは日常場面での他者への高い攻撃性が特徴だが、女兒に比べて男児においてそうであることを見出している。前段は、臨床的にかねて主張されてきた臨床的に重要な知見である。

中学生を研究協力者に、黒田・桜井 (2003) は、友人関係において、関係を通して自己の成長を目指す目標と抑うつとの負の関係、性格について良い評価を得ることを目指す目標と抑うつとの負の関係、性格について悪い評価を避けることを目指す目標と抑うつとの正の関係、に介在するメカニズムとして、ディストレス生成モデルとユーストレス生成モデルを検討、後者、すなわち、目標志向性が対人行動を通してポジティブな出来事を促進 (ないし抑制) し、その結果抑うつが抑制 (ないし促進) される、というモデルで説明されることを見出している。例えば、「友達とうまくやっていく」という目標の場合、「嫌われないようにする」ではなく、「かかわり方を学ぶ」「どうしたら好かれるか考える」が重要になる。「…しない」ではなく「…する」の重要性は、脳科学的にも主張されている (個人的趣味で e. g., 久保田, 2003)。

関連して、高木・七條・佐々木 (2003)、七條・高木・佐々木 (2003) は、小学校高学年・中学生を研究協力者に、引込み思案児は、非引込み思案児より不合理な信念をもちやすく、過度に自分への注意が向けられること、自己に対する認知が否定的になりやすいこと、他者への注意が向きにくいこと、を見出している。であれば、なおさら、「否定的評価を受けないようにする」ではなく、「かかわり方を学ぶ」「肯定的評価が得られることを考える」が重要になろう。

高校生を研究協力者に、松岡・勝俣 (2003) は、自己のコンピタンスを高く認知している者の抑うつ傾向は低く、低く認知している者の抑うつ傾向は高いことを見出し、抑うつ軽減には、日常生活を通してコンピタンスを適正水準まで高め維持することが有効、と示唆している。が、逆もあろう。

大学生を研究協力者に、伊藤・横田 (2003) は、完全主義・注目欲求・自己期待の相互影響を見出すとともに、不安や抑うつを直接予測するのは完全主義、特に、ミスや過度に気にする傾向であることを見出し、完全主義への介入による不安や抑うつの低減可能性を示唆している。が、逆もあろう。

事例 津田 (2003) は、性的罪悪感と結びついた不安を抑うつ不安として心的に体験できないために身体症状化していた、と理解される事例を通して、身体症状がこころの痛み (抑うつ不安) からの退避として用いられることがあることを例証している。

甘え

調査 玉瀬 (2003) は、大学生を研究協力者に、甘えたい欲求の強い人ほど (相互独立的自己観に対して) 相互協調的自己観をもっていること、甘えられたい欲求が強い人ほど女性性が高いこと、を見出している。甘え尺度が生成中である。

事例 後藤雄一郎 (2003) は、外面は職業人としての現実適応を重んずる大人としての姿を見せながら、内面では幼児のように愛情を希求し、根強い身体症状を訴えるクライアントとの、現実適応を射程に置いて大人としてのクライアントを尊重しながら、子どものような甘えにふれるカウンセリング過程を通して、甘えを年齢や環境に即して実現していくことが現実適応に関する重要な課題の1つとなりうることを、例証している。甘えられること、甘えられる対象をもつことは、かねてから重要な精神的健康の指標だったと思う。

対象認識の軸II：発達一発達臨床心理学— 児童虐待

調査 一般保護者の虐待認知について、中嶋 (2003) は、「身体に煙草を押しつける」など重度虐待の認知の個人差は小、「叩いたが怪我や痣は生じず」など軽度虐待の個人差は大、虐待認知度は虐待重度に対応、「買い物の間、乳幼児を車中に置く」などすぐには影響が及ばない行為では虐待と認知しやすい人とそうでない人がいることを見出している。常識の確証である。

虐待の通告について、梅原 (2003) は、児相への通告経路を次のように報告している。福祉事務所 9 %、その他県市町村 10 %、保育園 6 %、警察 9 %、保健師 7 %、医療機関 10 %、幼稚園・学校 11 %、児童委員 2 %、虐待本人 4 %、家族・親戚 11 %、近隣・知人 16 %、その他 3 %、不明 2 %。就学前児は医療機関、保健師、保育園から、小学生以上では学校、警察、近隣・知人から、が多かった。身体的虐待は医療機関から、ネグレクトは近隣・知人から、が多かった。虐待本人 4 % に注目。虐待不安が主訴の方にお会いすることも多い。

関連して、虐待不安について、庄司 (2003) は、虐待不安には 4 つの下位不安 (育児行動の非統制感・虐待への危機感・育児への自身欠如感・育児拒否感) があり、育児不安とは異なること、母性愛ビリーフの一部と関連をもつこと、抑うつと関連が高いこと、を見出している。虐待者の苦しみが伝わってくるようだ。虐待者支援は、虐待対策の不可欠の一部である。

翻って、被虐待児の特徴として、坪井 (2003) は、施設入所被虐待児の他者評定による特徴として、非虐待児と比べて、背景に怒りの存在を感じさせる非行や攻撃性な

どの外向的問題と、注意や社会性などの行動・情緒問題が高いことを見出し、李 (2003) は、本人評定による特徴として、一般児童生徒と比べて、行動・情緒問題が高いこと、特に女子において内向的問題行動の傾向が高いことを見出している。臨床的には、坪井・李 (2003) の、職員は客観的に子どもの問題を捉え、子どもの主観的な問題に気づきにくい、の発見が重要。

また、橋本・金澤・小出 (2003) は、身体的虐待児とネグレクト・心理的虐待児とのロ・テストを通して、前者は情緒不安定が行動に顕在化しやすく、後者は抑うつ的で目立たないことから、重さに気づかれないことを示唆している。

最後に、青木・松本・内田・井上・石原・森本・石井 (2003) は、家庭内暴力と身体的虐待をトラウマとして、乳幼児期に PTSD を発症したと思われる事例を通して、乳幼児期 PTSD の存在を見出している。

事例 被虐待児に対する心理臨床援助モデルには、①生活環境を治療的に活用するという考え方に基づいた修正的接近と、②トラウマに焦点を当てて行われる個人遊戯療法などの回復的接近とがある。

大迫 (2003) は、ネグレクトにより非行傾向を示すようになり、施設に入所していた小 5 男子の事例を通して、修正的接近＝環境療法の有効性と必要性とを例証している。

一方、安齋 (2002) は、回復的接近における技法の工夫として、小 5 の頃から性的虐待を受けた 25 歳女性サヴァイヴァの事例を通して、記憶の再構成促進のため、被害体験をことばで語る従来のカタルシスとは異なり、内的現象の表現として風景構成法・自由描画による表出の意義と有効性とを例証している。

松嶋・根本・古荘・奥山 (2003) は、いじめによる PTSD を伴った小 5 不登校女子の事例 (松嶋・根本・柴田・古荘・飯倉、2003 の事例 3) を通して、トラウマを直接扱わずとも、周囲の理解の促進・本人の安心感の再形成・自信の回復の支援を通してトラウマからの回復がはかれることを例証している。

以上、トラウマとの直接接触を直接目的としないという点で、より内科的である。世の心理臨床に対する見方の外科的偏向に対し、実践における専門家の健全さが示されている (矢幡 (2003) によれば、本邦でも『心的外傷と回復』で著名な Herman, J. L. による PTSD に対する記憶回復療法は、偽記憶症候群の社会問題化を介して、これまた本邦で著名な認知心理学者 Loftus, E. F. により論破され、破綻しているという)。

その他、齋藤・石田 (2003) の虐待を受けた 4 歳男子との遊戯療法、若井 (2003) の全身火傷を負った小 3 女子との遊戯療法の報告がある。

不登校

調査 まず、不登校をした成人はどうなる？ 桑代・郷間・森下 (2002) は、社会適応している不登校経験成人を研究協力者にバウムテストを行い、心理状態が不安定な者の存在、また、不登校期間が長くなると情緒発達の差が生じること、を見出している。現下の(援助)体制のもとでのことだ、と留保し、(援助)体制について再考するのが臨床の発想だろう。

次に、不登校をした中学生はどうなる？ 霜村・小林 (2003) は、中学時不登校後、通信制高校在籍、サポート校と称する私塾で学習支援を受ける生徒を研究協力者に、中学から現在まで一貫して自己外向感・自己親近感の低い生徒にとっては、学習への自信が自己外向感の向上と関連すること、生徒と教師との物理的接触が回復期に重要なこと、を見出している。学習支援は従来ややもすれば等閑に付されているが、と同時に、こころある臨床家はかねてから強調し、縦横に行っていることである (e. g., 後述松寄・根本・柴田他, 2003)。

では、本人から見た不登校乗り越え要因は？ 今田 (2003) は、不登校を経験した20代半ばの男性を研究協力者に、PAC 分析により、不登校を乗り越えていく上で重要な要因として、友人や母親との母性的なかかわり、自分の価値意識と父親的なかかわり、学校関係との人間関係、を見出している。

その際、周囲からの再登校への働きかけの時期は？ 佐藤昭雄 (2003) は、想定しがちな新年度・新学期より、学期・学年末の終業式やその直前の行事が有効、と提言。すでに臨床家の知恵になっていると思う。

それにしても、周囲と言えは母親！ 宇野 (2003) は、不登校児をもつ母親が相談・援助機関にかかわる以前に感じるストレスについて、年齢が高いほど援助を得ることに抵抗感がないこと、仕事をもっていない方が夫・家族に対する否定的感情が強いこと、家族や周囲から援助を得られずにストレスを感じているほど早い段階で機関にかかわりをもつこと、子どもが最高学年 (小6・中3・高3) で不登校になったときにストレスが高いこと、を見出している。母親が、原因として指弾の対象ではなく、変化のエージェントとしてサポートの対象であることは言うまでもない。が、まだまだ何度でも言わねばならないかもしれない。

最後に、不登校傾向と学校や親との関係。まず、学校との関係。原 (2003) は、子どもが学校から離れる力 (斥力) と学校に向かう力 (引力) になっていると考えられる事柄について、中学生・保護者・教師の意識のズレを見出している。斥力について、保護者・教師は「いじめっ子」「嫌な行事」など特定の事柄を、中学生は「疲れている」

「眠い」など漠然とした事柄を考える。引力については、三者ともまず「友人」を考えるが、それに次ぐものとして、中学生は「高校進学」「将来のため」など目的的な事柄を考えるのに対し、保護者・教師は登校するのは「当然」として特定の事柄を考えない。よくあるズレをそのまま浮き彫りにしている。

次に、親との関係。五十嵐・萩原 (2003) は、中学生を研究協力者に父親への愛着との関連を調査し、不登校傾向低減には、概して幼少期に父親に不信・拒否感を懐かず、安心・依存できる愛着関係を築いていること；しかし、情緒的混乱と考えられる精神・身体症状を伴う不登校傾向の低減には、そうした関係より、子どもが分離不安や不信・拒否感を懐かない育児を父親が行うこと、が重要であることを見出している。続いて萩原・五十嵐 (2003) は、父母の相違について検討し、従来通り、幼少期においては父親より母親との愛着関係が重要であることを見出している。しかし、父親の意義がいさきかも減ずるものではない。

事例 まず、主として本人への援助。和田 (2003) は、学校にも家庭にも居場所のない小5不登校女子が、病院の心理室をシェルターのように活用した事例を報告している。松寄・根本・古荘他 (2003, 前出) は、小5不登校女子の事例を通して、クライアントの心身の成長など時間経過も改善の一要因として大きな意味をもち、その1つの転機として進学があることを例証している。医聖ヒポクラテスの昔から、臨床最大の味方が時間であることは変わらない。秋庭・井澤・鳥越 (2003) は、フリースクールに通う高校生を研究協力者にロールレタリングを行い、心理的サポートとして有効なことを例証している。

次に、主として母親への援助。鴨沢 (2003) は中3不登校女子の母親との面接を、小泉 (2003) はアルコール依存症の父親をもつ高2不登校女子とその母親との面接を報告している。

グループアプローチとして、上原 (2003) は、カウンセリングキャンプを紹介し、再登校21%、改善傾向68%、変化無11%と報告している。裏・樋口・阿部・池田 (2003) は、不登校生徒のグループアプローチを報告し、個と集団の展開のバランスを、タテ (個別化) とヨコ (社会化) の均衡として考察している。

最後に、適応指導教室。甲木・岩田・中村 (2003) は、適応指導教室類似事業の10年を考察し、居場所から個々に応じた教育を提供できる場へ、そして臨床と小集団教育の場への変化を素描し、適応指導教室の充実はもう1つの学校をつくる恐れとなる、と考察する。子どものニーズに合ったもう1つの学校ができるのはいいことと思われるのだが…(それを受け容れる社会的素地がまだない、というこ

とか…。

対象関与の方法論Ⅰ：理解—アセスメント—

診断基準の検討として、青木他(2003, 前出)は、乳幼児期 PTSD 診断における Scheeringa, & Zeanah の診断基準の DSM-IV に対する優位を例証している。

新尺度構成として、佐藤・丹野(2003)は、対人場面における自己への偏った注意が不安感増大や遂行低下など対人不安の維持因子として働くという認知行動モデルに基づき、Woody, Cambless, & Glass の対人場面での焦点的注意を測定する Focus of Attention Questuinaire をもとに、状態版焦点的注意尺度の作成を試みている。

また、齊藤・眞榮城(2003, 前出)は、女性自身が社会的に是認された美の基準をどのように認知・受容しているかを測定する Heinberg, Thompson, & Stromer の Sociocultural Attitudes Toward Appearance Questionnaire の妥当性を検討し、体型文化の内在化、社会的手段としての体型、他者の体型認知の3因子を見出している。

既存ツールの指標探索として、佐野(2003)は、専門学校生を研究協力者にコラージュを作成してもらい、集団に溶け込めない悩みが高い群は型通りに切り抜かないこと、生きることに疲れる悩みが高い群は対象の一部を切断して用いないこと、自分を統制できない悩みが高い群は自然風景の切り抜きを用いないこと、を見出している。コラージュにおける指標研究である。

対象関与の方法論Ⅱ：援助—カウンセリング—基礎論

主体変容的方法 鶴田(2003a)は、研究者が対象に影響を及ぼさないよう距離を取り、あたかもそこにいないかのように観察・測定・記録する客体観察的方法に対して、相手の運動や変化と密着して自分自身を変化させ調節しながら相手を理解していく方法、すなわち、黒田正典の主体変容的方法の実践者として、動物学者・間直之助を浮き彫りにしている。これこそ臨床実践方法論の基本だろう(佐治・岡村・保坂, 1996, 岡村, 1999)。同時に、間は、行う者は語らず、の範例でもある。鶴田(2003b)も参照。

治療的 splitting 羽間(2002)は、非行少年との事例を通して、カウンセラーは、対象関係の分裂したクライアントとともにいようとすると必然的に Good Object と Bad Object とに“引き裂かれる”こと、治療関係発展のためにはこの分裂を保持しなくてはならないこと、また、カウンセラーは、クライアントの言動がみずからの規範意識や価値観と相容れず、厳しい葛藤を感じて“引き裂かれる”ことがあること、このとき、クライアントを共

感的に理解したい思いと、クライアントの言動との対決との分裂を保持することが重要であること、を例証し、治療的 splitting と概念化している。最近1年の臨床部門における最もオリジナルな貢献と思う。行うがゆえに語れる、の範例でもある。

融通無碍 鴨沢(2003, 前出)は、中3不登校女子の母親との面接を通して、あえて構造や構えを1つに決めないこと、クライアントのニーズに柔軟かつ的確に反応して解決を図ることの重要性を学んだことを述べている。何度でも学び直す重要事項である。

傾聴 原田(2003)は、グラウンデッド・セオリー・アプローチにより、人が他者の悩みを聞く際の発言カテゴリーを抽出し、自分の体験を開示したり、問題を受容するよう促したりする点に、臨床面接や援助技法とは異なった日常的な相談・援助のあり方を見出している。面接や技法の理念に照らせばそうかもしれない。が、現実には照らせばどうか？ 専門家が現実に行っていることはどうか？

青木(2003)は、システムズアプローチでは、行為自体が行為の意図の達成を阻む現象を行為の意図せざる結果と呼び、これを偽解決や問題維持システムと見、悪循環を起こしているシステムに介入するが、聴くこと自体が悪循環解消に効果ある可能性を例証、Bateson, G. を援用して、われわれが最も普通に学習と呼んでいる学習Ⅰに対して、経験の集積としての自己・態度レベルでの学習Ⅱの水準での聴くことが悪循環の解消に効果的、と考察している。臨床的に聴くことの再評価・理論化である(岡村, 2003 参照)。

技法論

認知行動療法 杉浦(2002)は、問題焦点型対処方略と思考の制御困難性との関連に関する研究を通して、認知行動療法で心配の得失を考える際、一般論として心配の得失を列挙するのみならず、この状況ではこのくらい考えると効果的、これ以上考えると苦痛が増加する、といった評価に基づいた介入の必要性、また、完全主義的目標の修正の重要性を示唆している。

桃井・大島・大澤(2003)、大島・桃井・大澤(2003)は、公的自意識の高い人は問題焦点型対処方略のみが採用される傾向が強いことを見出し(私的自意識の高い人は情動焦点型を中心に、問題解決型、回避・逃避型も採用)、対処レパートリー増加を目的とした面接が解決の一助、と示唆している。青木(2003, 前出)に倣えば、学習Ⅱ水準での援助である。

伊藤(2003, 前出)は、摂食障害のカウンセリングにおいて、合意された目標が何らかの具体的な問題の解決であれば、認知療法の適用が効果的でありうるが、探索的な

目標である場合などは、それに沿った別の方法の方がむしろ効果的、と例証している。方法論先行に対する妥当な戒めである。

外在化 問題の外在化は、問題を“虫退治”のようなメタファーで本人から切り離して外に位置させ、問題に向き合いやすくする技法である。

三栖・工藤(2003)は、認知構造についての近似的情報を外在化する技法として教科教育において研究されている概念地図法を、メタファーを用いない問題の外在化と位置づけ、一例報告を行っている。

小林(2003)は、人のさまざまな側面を準人格化してニックネームをつけたサブパーソナリティ・トランプを用いて、I am “切れ屋”.ではなく、I have “切れ屋”.を意識できたことで、衝動をコントロールできるようになった小5男子の事例を通して、サブパーソナリティ・トランプの有用性を例証している。

他に春原(2003, 前出)がある。

母子同一カウンセラー 小泉(2003, 前出)は、高2不登校女子とその母親との面接を通じて、母子同一カウンセラー、面接に現れない父の存在を活かすこと、をめぐって考察している。つねに旧くて新しいテーマである。

実践領域—社会臨床心理学—

教育領域—教育研究所・教育相談室—

中村・大野・中市(2003)は、今後、公的教育研究機関(公立の教育研究所・教育センター等総称)は、ニーズに応じた訪問・巡回相談の実施、ITを活用した教育相談活動の展開、地域における心理教育的援助サービスのコーディネートセンターとしての役割、教育相談員等と教職員との合同研修会の実施、適応指導教室の企画・運営と連携活動など、子どもや家庭のニーズに応える取り組みを行うための地域の総合教育研究センターとして活動を行いたい、と提言している。

原田・山田・谷田内(2003)は、教育センターの夜間・土日開室への利用者のニーズを報告している。

司法領域

調査 藤野(2002)は、鑑別所入所中の男子非行少年を研究協力者に、その交友関係はうわべを取り繕ったその時その場限りのものではないことを見出し、不良交友を絶つには、非行に従事しない者との交友を展開できるとの実感がもてることが重要、と示唆している。

中島(2003)は、少年院仮退院を控えた“非行少女”を研究協力者に心理書簡法を行い、現在の自己・他者関係の認知が立ち直りの際重要、と考察している(“非行少女”ではなく“女子非行少年”だろう)。

門本(2003)は、鑑別所入所者を研究協力者に、自殺企

図歴が精神科青年期患者なみ(北村, 1987)であることを見出している(それぞれ、企図歴有: 11.7%, 約1割, 複数回: 48%, 41%)。

事例 少年院における三栖・工藤(2003, 前出)、保護観察所における羽間(2002, 前出)のほか、家裁において佐藤克(2003)は、抑うつ的なこころの痛みに対する防衛機制としての非行、との理解から、この痛みをもちこたえさせる holding environment としての補導委託の有効性を例証している。河野(2003)は、娘の非行に翻弄される両親との面接を報告している。

福祉領域—入所施設における援助—

大迫(2003, 前出)は、入所施設における環境療法の有効性と必要性を例証している。

また、齋藤・石田(2003, 前出)は、施設入所児と施設内で遊戯療法を行うとき、構造上日常と非日常の境界が曖昧になる可能性に対し、職員との連携により問題を解決し、むしろ効果的に活かす方法を模索している。

産業領域

事例として、後藤雄一郎(2003, 前出)がある。

医療領域—小児科—

松畚・根本・柴田他(2003, 前出)は、学校での問題が大きく関与していると思われる事例に対し、小児科医の診療に加えて臨床心理士がカウンセリングを行い、必要に応じて学習面での支援を実施した事例を通して、学習支援の有効性を例証している。松畚・根本・古荘他(2003, 前出)も参照。

安立・黒川・河野・國松・植田(2003)は、小児科領域における心理臨床的にかかわりの実態と意識について、小児科医および心理臨床家がそれぞれどう捉えているかを知ることを通して、小児科領域を訪れる親子に対し小児科はどのようなアプローチが可能なのか検討すると予告している(予告が論文の内容とは!)。

山田・山田・後藤(2003)は、遺伝子疾患の子をもつ母親とのカウンセリングを通して、臨床心理士は医学的専門知識をもちながらも、疾患を突きつけられたクライアント(母親)と同じ視点で医療に向き合っていく必要性を例証している。実践の基本にブレがない。

おわりに

研究(者)への期待 以上、街の一カウンセラーとして、実践への示唆の視角から簡潔な紹介とコメントを試みた。これらは、これまでの臨床知見を、直接実証したり、実証された事実に基づき示唆したり、新たに概念化したり、重ねて例証したり、などしていた。積極的に言えば、これまでの実践が支持され、これからの実践が励まされた。

が、これまでにに対する反証が1つもなかった。新たな物の見方・世界の整序様式がなかった。消極的に言えば、従前の実践を改訂する必要を迫られなかった。人には当然の限界があるがゆえに、他者の研究や実践に学び、より“よい”実践を目指す、からすれば、物足りなかった。時間を無駄にした、とも思えた（面接しての方がよかった）。読み取り・読み込み不足か。積極的に言えば、目前のクライアントやスーパーヴァイジーから学ぶことの優位を確認させられた。

だが、短い人生を、基本的に目前のクライアントやスーパーヴァイジーに学びつつ自分の身一つで歩む街の一カウンセラーとして、みずからの経験の歪みや狭さを、クライアントやスーパーヴァイジーとは別の視角から矯正してくれる研究（者）への期待は（あまりにも）大きい。

そして、最初に記した積極的意義を低く見積もることもできない。変化は、生じたときに気づくくらい静かに、しかし、生じたときには後戻りできないくらい確実に、起きていると思う。

テーマまたは研究 その一つが、テーマが社会的ニーズに応じていることだ。が、これにも二面ある。一面は、それは当然。とても大事。学問としても。アクチュアルな実践学としての臨床としても。

もう一面は、相変わらず。これにも二面ある。一面は、相変わらずのテーマ。もう一面は、相変わらず世の中次第か。最近なら、老人の激増は歓迎だが、いじめの激増・激減は疑問。

個々のテーマ内では、研究協力者やテーマに偏りない予定調和が見られた。が、バラバラとも言える。

論文の体 論文として読もうとすると、論文の体をなさぬ発表が散見された。問題・目的・方法・結果・考察という表現上の形式踏襲の問題ではなく、そうした思路の欠如がうかがえる、のである。読みやすい≠できる、と感じさせられる発表とそうでない発表との懸隔の大きさには愕然とする（内容評価とは別問題）。臨床は、人を愚かにするコミュニケーションの実践学ではないはずだ（賢くする訳でもないが）。

また、およそ研究としての実を備えていない発表もあり、暗澹（それでも、いいとこ取りの紹介をした）。

臨床的示唆 そんな中でも、臨床的示唆の記述はありがたい。街の一カウンセラーとしては、実は、高度な概念レベルの事柄は読み取りにくく、むしろ、実証された事実からの臨床的示唆の方に関心があり、かつ、読み取りやすくもあり、そこを中心に紹介した。

中には、あってしかるべき示唆が欠如していたり、結果から示唆への飛躍が大きすぎたり、結果に基づく要もない一般論に惰していたり、もある。倫理の問題ではな

く、倫理の問題として、次のことに繋げたい。

実践と研究の倫理 臨床部門の研究は、臨床的示唆なしでは、いかに基礎的研究であっても、研究協力者に対して、実施が正当化されない、と思う。質問項目たった1つに被爆されることによって、これまで考えたこともないことを考えさせられ、直面させられ、場合によってはそれが外傷となる。これが臨床のセンスであり、それは研究と実践とを問わない。臆病になることではなく、畏敬の念をもっているかどうかだ。論文の体をなさぬのも、研究としての実を備えないのも、論理的飛躍も、結果を大事にしない一般論への転落も、研究協力者の協力への不誠実、と思う。

尺度 不誠実と言えば、紙幅の関係か、使用尺度が（著名ゆえにか）明記されていない発表もあった。

また、汎用される研究尺度は、原著者または第三者によって10年単位で検討され続け、賞味期限切れにならないことが望ましいと思った。

アナログ研究 児童虐待、不登校を除き、非臨床群を研究協力者としたアナログ研究が多かったのは、渉猟した研究の範囲ではあきらめることとする。

研究方法論の批判的検討への期待 最後に、今後のレビューにおいては、研究方法論に焦点を当てた批判的検討を期待する、と記して終わりたい。

引用文献

- 安立奈歩・黒川嘉子・河野伸子・國松典子・植田有美子
2003 小児科領域における心理臨床の根づきに関する研究 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 285.
- 秋庭長子・井澤信三・鳥越隆士 2003 不登校を経験した高校生へのロールレタリングの適用の試み— リースクールを選択した事例を通して— 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 319.
- 秋元聡子・鈴木信子・長野祥子 2003 摂食障害患者の母親に対するグループアプローチの試み— 現状と課題 — 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 278.
- 安齋順子 2002 父からの性的虐待を受けた女性への心理面接 心理臨床学研究, 20, 221-229.
- 青木みのり 2003 不登校事例に見られる「行為の意図せざる結果」— 悪循環に対する「聴くこと」の効果を検討する試み— 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 531.
- 青木 豊・松本英夫・内田良一・井上美鈴・石原真理・森本麻穂・石井朋子 2003 乳幼児期における外傷後ストレス障害 (PTSD) — 2 症例の検討 — 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 171.
- 栗谷初子・本間友巳 2003 中学生に見る対人恐怖心性

- と自己愛傾向との関連について 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 90.
- 藤野京子 2002 男子非行少年の交友関係の分析 教育心理学研究, **50**, 403-411.
- 後藤佳代子 2003 青年期後期における孤独感と摂食態度の関連—孤独感類型尺度と摂食態度調査表を用いて— 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 253.
- 後藤雄一郎 2003 疼痛の背景としての甘えを分かりゆく過程—現実適応を目指した長期休職者の事例— 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 20.
- 萩原久子・五十嵐哲也 2003 中学生における不登校傾向に関する研究—(4)父子関係と母子関係との相違— 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 740.
- 原 裕貴子 2003 登校を促進・抑制するものに関する中学生・保護者・教師の認知の違い 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 92.
- 原田恵理子・山田文子・谷田内智子 2003 教育センターにおける心理相談活動に関する一考察II—相談員の活動認識の視点から— 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 736.
- 原田杏子 2003 人はどのように他者の悩みを聞くのか—グラウンデッド・セオリー・アプローチによる発言カテゴリーの生成— 教育心理学研究, **51**, 54-64.
- 春原由紀 2003 摂食障害を課題としてグループカウンセリング(2)—描画による問題行動の外在化について— 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 54.
- 橋本泰子・金澤直樹・小出太美夫 2003 被虐待児の研究(2) 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 234.
- 羽間京子 2002 治療的 Splitting について—非行少年の事例を通して— 心理臨床学研究, **20**, 209-220.
- 五十嵐哲也・萩原久子 2003 中学生における不登校傾向に関する研究—(3)父親との関連— 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 739.
- 伊藤絵美 2003 摂食障害のクライアントへの認知療法適用についての考察—認知療法を適用しない事例との対比を通じて— 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 56.
- 伊藤研一(編) 1999 心理臨床の海図 八千代出版
- 伊藤菜穂子・横田正夫 2003 不適切な動機による完全主義が不安・抑うつに及ぼす影響 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 261.
- 門本 泉 2003 非行臨床における自殺予防のための基礎的研究 心理臨床学研究, **21**, 91-97.
- 鴨沢あかね 2003 不登校児の母親面接—公立教育相談室における援助— 心理臨床学研究, **21**, 125-136.
- 加藤佳子 2003 甘みに対する態度と対処方略・痩せ願望および食行動の異常傾向との関係 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 523.
- 甲木有紀・岩田 勝・中村 健 2003 不登校支援事業の現状と課題②—「光の森」自主活動の変遷を振り返って— 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 639.
- 北村陽英 1987 青年期自殺未遂の精神療法 季刊精神療法, **13**(2), 22-19.
- 小林あけみ 2003 トラブルメーカーの自己理解 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 317.
- 小泉隆平 2003 アルコール依存症の父親をもつ不登校女子高校生とその母親との面接—母娘を同一セラピストが面接することと、面接に現れない父親の存在を生かすことを巡って— 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 86.
- 河野莊子 2003 長女の非行に翻弄される両親との心理面接過程—面接場面で両親が体験したものとは?— 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 123.
- 今田博之 2003 PAC 分析による不登校回復期の要因探索に関する研究 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 86.
- 久保田 競 2003 禁煙で天才脳をつくる! KK ベストセラーズ
- 黒田祐二・桜井茂男 2003 中学生の友人関係場面における目標志向性と抑うつとの関係に介在するメカニズム—ディストレス/ユーストレス生成モデルの検討— 教育心理学研究, **51**, 86-95.
- 桑代智子・郷間英世・森下 一 2002 不登校を経験した成人の対人関係について 教育心理学研究, **50**, 345-354.
- 李 明憲 2003 Youth Self Report (YSR) による被虐待児の行動・情緒問題の特徴—一般児童との比較検討— 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 308.
- 眞榮城和美・齊藤千鶴 2003 摂食障害傾向における多側面的検討(2)—摂食障害傾向に影響を及ぼす自己評価の多側面的検討を中心として— 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 250.
- 松岡奈緒・勝俣暎史 2003 高校生の抑うつとコンピタンス 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 313.
- 松寄くみ子・根本芳子・古莊純一・奥山眞紀子 2003 高校進学をきっかけに改善した不登校の1例—いじめによる PTSD を伴った事例— 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 168.
- 松寄くみ子・根本芳子・柴田玲子・古莊純一・飯倉洋治 2003 学習の支援が有効であった複数事例による検討 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 734.
- 三栖敬之・工藤弘人 2003 概念地図法を用いたナラ

- ティブ・アプローチの可能性 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 309.
- 桃井真帆・大島典子・大澤麻子 2003 学生の自己意識とストレス(1)―自己意識特性とストレスの関連について― 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 310.
- 中島千加子 2003 非行少女の自己・他者知覚に関する心理書簡法による検討 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 527.
- 中嶋みどり 2003 一般保護者における児童虐待の認知 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 87.
- 中村 健・大野道子・中市理子 2003 公的教育機関における不登校に関する教育相談活動について 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 733.
- 野島一彦(編) 1995 臨床心理学への招待 ミネルヴァ書房
- 岡村達也 1999 カウンセリングの条件―純粋性・受容・共感をめぐって― 垣内出版
- 岡村達也(編) 2002 臨床心理の問題群 批評社
- 岡村達也 2003 個人心理療法の展開―佐治守夫『ゆう子のケース』を読む― 村山正治(編) ロジャース学派の現在 至文堂 Pp.153-165.
- 大迫秀樹 2003 ネグレクトを背景に非行傾向を示すようになった児童に対する入所施設での環境療法 心理臨床学研究, 20, 146-157.
- 大島典子・桃井真帆・大澤麻子 2003 学生の自己意識とストレス(2)―対処の特徴について― 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 311.
- 小塩真司 2002 自己愛傾向によって青年を分類する試み―対人関係と適応, 友人によるイメージ評定からみた特徴― 教育心理学研究, 50, 261-270.
- 太田裕一 2003 対人恐怖事例におけるセラピストの自己開示と距離の取り方について 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 154.
- 齊藤千鶴・眞榮城和美 2003 摂食障害傾向における多側面的検討 (1) ―日本版 Sociocultural Attitudes Toward Appearance Questionnaires の妥当性の検討― 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 233.
- 齋藤 愛・石田 弓 2003 虐待を受けた4歳男児のプレイセラピー―恐怖に満ちたAくんの世界が輝き始めるまで― 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 151.
- 佐治守夫・岡村達也・保坂 亨 1996 カウンセリングを学ぶ―理論・体験・実習― 東京大学出版会
- 櫻井眞澄・櫻井まち子 2003 摂食障害における言語中心の療法・創作療法&運動療法の統合に関する試み―歩行中に失神し大学病院ICUに搬送された男子大学生(19)への退院後の対応― 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 44.
- 佐野友泰 2003 コラージュ作品の客観的指標と不安・対人恐怖心性との関連 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 239.
- 佐藤昭雄 2003 不登校児童生徒の再登校プロセスに関する一考察 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 94.
- 佐藤香織・丹野義彦 2003 状態版焦点的注意尺度作成に試み 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 426.
- 佐藤 克 2003 非行少年の対象関係をめぐる一考察―補導委託を行った少年事例から― 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 104.
- 七條佳代・高木尚子・佐々木和義 2003 引っ込み思案と不合理な信念の関連(2)―中学生について― 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 529.
- 霜村 麦・小林正幸 2003 不登校経験者の自己概念の変容に関する研究(2)―不登校経験者の自己概念の変化と中学卒業後の体験との関連について― 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 638.
- 下山晴彦(編) 2002 よくわかる臨床心理学 ミネルヴァ書房
- 下山晴彦・丹野義彦(編) 2001-02 講座臨床心理学 東京大学出版会 6巻
- 庄司一子 2003 子育て中の母親が懐く虐待不安 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 737.
- 杉浦義典 2002 問題焦点型対処方略と思考の制御困難性の困難―問題解決課程を評価・制御する認知に着目して― 教育心理学研究, 50, 271-282.
- 田井研一 2003 青年期における対人恐怖心性と性役割葛藤との関連 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 525.
- 高木尚子・七條佳代・佐々木和義 2003 引っ込み思案と不合理な信念の関連(1)―小学校高学年について― 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 528.
- 高橋美知子 2003 高校生の自己愛傾向に及ぼす親の養育態度の影響について―親子関係診断テスト(EICA)との関連から― 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 423.
- 武田洋子 2003 児童期抑うつの特徴―性差に着目して― 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 251.
- 玉瀬耕治 2003 「甘え」と関連する要因に関する実証的研究 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 418.
- 坪井裕子 2003 CBCLによる被虐待児の行動と情緒

- の特徴 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 191.
- 坪井裕子・李 明憲 2003 CBCL と YSR による被虐待児の行動・情緒の多面的検討 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 262.
- 津田真知子 2003 抑うつ不安からの退避としての身体症状について—心の痛みの気づきとそのワークスルー— 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 49.
- 鶴田一郎 2003a 「サルになった男」間直之助—主体変容的方法の実践者— 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 420.
- 鶴田一郎 2003b 「サルになった男」間直之介—主体変容適法法の実践者— 人間性心理学研究, **21**, 27-36.
- 上原貴夫 2003 カウンセリングの視点から見た不登校児童生徒のキャンプ活動に関する研究 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 518.
- 梅原千秋 2003 児童相談所における来所者の相談経路について(3)—虐待相談での通告経路の調査報告— 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 268.
- 宇野敦子 2003 不登校児をもつ母親の意識の研究—外部の相談・援助機関に関わる以前の母親のストレスの特徴— 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 744.
- 裏 美紀・樋口貴代・阿部敬行・池田豊應 2003 「ヨコ体験グループ」の展開(2)—不登校生徒のためのグループ・アプローチにおける「個」と「集団」のあり方についての検討— 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 81.
- 和田裕美 2003 不登校女兒がシェルターとして病院を利用した事例 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 743.
- 若井久仁子 2003 全身火傷を負った被虐待児の遊戯療法—児童養護施設において— 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 19.
- 矢幡 洋 2003 危ない精神分析—マインドハッカーたちの詐術— 亜紀書房
- 山田祐子・山田一之・後藤雄一 2003 遺伝カウンセリングにおける臨床心理士の役割III 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 732.